

# 一心寺かわら版

第四十一号 平成二十九年九月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

## 鎌田實氏 仏教講演会報告



なぜ仏教講演会に鎌田さんをお招きしたのか。鎌田さんは身体の治療だけでなく、心のケアも含めていのち全体を大切にされます。仏教は古来よりいのちを見つめてきました。いのちとはいったい何だろう、どのようにすれば元気に安らかに生きていけるのかを考えてきました。

同じくいのちの安らかなることを目指す医療者と宗教者が手を携えていくのは自然なことです。鎌田さんの豊かな経験からいのちを巡るお話を聞かせていただき、どのようにいのちに向き合っていくのかを考えてみましょう。

三十八億年前に生命が誕生、最初は単細胞。いのちは必ず終わるが、クローンを作ることができた。しかし、全く同じいのちが生まれるということはない、一つのいのちが終わりを迎えようとも悲しくはない。その後、性別ができてそれぞれの染色体を一つずつ引き継ぐ唯一無二のいのちが生まれるようになった。だからそのいのちに終わり訪れると悲しいのである。頭が良かろうが悪かろうが、障害があろうがなかろうが、全てのいのちが同じく三十八億年のいのちの歴史を持っているのである。

七百万年前に人類が誕生、直立二足歩行をし、木の実などを取って蓄えるようになった。それまで力によって異性を争っていたのが、物をプレゼントすることで気を引くようになった。それが人類の愛の原点。そして百七十年前の人間に、生まれつき歩けない人が成人まで生きていた形跡がある。誰かの世話によって歩けない人が生き長らえた。ケアの原点である。人間は愛とケアの心を古来より持っている。

今一度、しあわせについて考えなければならぬ。感動することによってセロトニンという喜びホルモンが出て幸せになる。人のことを考えることによってオキシトシンというホルモンが出て相手をしあわせにする。それが回ってまた自分もまたしあわせを感じる。

鎌田さんは一歳十か月の時に岩次郎さん夫妻に拾われて育てられた。医学部に進みたいと言ったが反対され喧嘩と



(サイン会も快く)

なり、ついには父の首を絞めてしまった。

「何もしてあげられないけど自由に生きていい。そのかわり自分の責任で生きていくんだ」と許しを得た。「威張ったり、患者を怒鳴ったりする医者になるな。苦しんでいる人の話を聞いてあげられる医者になれよ」との言葉は今でも心に刻まれている。

結婚後、実の親ではないと知る。隠していた父母、妻のやさしさに気付いた。これまでの人生がすべてのいのちのつながり、愛に生かされていたという思いが今、医師として、イラク、チェルノブイリ、福島などでのさまざまな活動につながっている。

自らのいのち、生き方、死に方は自らで決めていく。その中で1%は誰かのために行動する。それがしあわせホルモンを増加させる。100%はできないが1%なら誰かのために動くことができる。是非、しあわせホルモンを出せるように行動し、しあわせに生きていきましょう。と、聞かせていただきました。



ルモンの話は仏教で説く自利利他円満、自らと他のしあわせはつながっているということ。鎌田さんのお話を自らの胸に問う、それ

最後に話をまとめてご挨拶さ

せていただきました。浄土真宗のお念仏「南無阿彌陀仏」の「阿彌陀」には、「はかりしれないのちのはたらき」という意味がある。すべてのいのちがつながっている、支え合っていると気付くことで鎌田さんの言う誰かのための1%の力が生まれる。しあわせはつ

は南無阿彌陀仏につながっている。完璧な人間にはなれないが、仏さまに導かれながらお浄土へ生まれ往くのが浄土真宗。お念仏を称え、自らのいのちを生き切り、他のいのちに寄り添っていききたいものです。

### おてらくご報告



初開催の「おてらくご」。仏教のお説教から始まった落語をご縁として、仏教に触れようという企画。咄家さんは上方落語の林家染雀師。最初の演目は「宗論」。

「おてらくご」とつっこむ父親。仏教では、ものごとは因縁によって成り立っていますから、神さまのような、いのちやものを作り出す絶対神を認めません。双方の教えのコントラストから笑いが生み出されます。

もともとは浄土真宗と日蓮宗の信者のいさかいの話が、いつしか浄土真宗とキリスト教になりました。熱心な浄土真宗の家の息子がキリスト教に帰依するようになったことから物語が展開。途中、私のいのちは神さまが作ったという息子、それに対して「私の息子と違うんかい、おっ母が神さん



一席終わった後は、「寿限無」を交えながらお念仏のお話をさせていただきました。生まれた子供にめでたい名前を付けようとして、お寺の和尚さんの所へ相談に行った父親。和尚さんから色々教えてもらったためでたい言葉を、全て並べて子供の名前にしてしまおう。「寿限無、寿限無、五劫の擦り切れ、海砂利水魚の水行末……」

「寿限無」とは、寿(いのち)に限(かぎり)が無(ない)ということのでめでたい。これは浄土真宗の御本尊、阿弥陀仏の漢訳「無量寿」のこと。阿弥陀というのは古代インドの言語で、日本語に直せば、かぎりないのちとはかりしれない光という意味。浄土真宗は、そのはたらきを身に受けていることに気付かされる教えです。

「五劫の擦り切れ」の「劫」とは、時間を表す単位。一辺四千里の岩を百年に一度布で撫で、岩が擦り減って完全になくなっても劫に満たないと言われます。インドでの計算では約四十億年になるそうです。それが五回擦り切れる、つまり永久に近いほど長い時間のこと。お経には、阿弥陀仏が、私たちを救うにはどうすればよいかを考えるのに五劫かかったと説かれます。それほど私たちは罪深い、さとりを開くことが難しいにも関わらず、南無阿弥陀仏といただくことによって仏にならせていただくのです。



「海砂利水魚」は、海の砂利や水中の魚のように数限りないことを表します。『阿弥陀経』には「恒河沙数」とあります。川の砂粒ほどに数え切れないということを表します。金子みすゞさん(上)の詩に「大漁」というものがあります。「朝焼小焼だ大漁だ。大羽鱸の大漁だ。浜はまつりのようだけど、

海のなかでは何万の鱸のとむらいするだろう」。仏教は、水の中にもどこにでも数限りないのちがあり、それは私と同じ重さののちであると教えます。

また、「星とたんぼぼ」という詩は「青いお空のそこふかく、海の小石のそのように、夜がくるまでしずんで、昼のお星はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」。浄土真宗は、恒河沙数の仏さまがいらっしやると説きます。その数限りない仏さまがお念仏する私を見守ってくだっている、そして私も人生を終えたらその仏さまの一人となって、後の者を見守らせていただくと思えます。

当時の人々は、このように落語の中に残るほどに、仏教を、浄土真宗の教えを聞いて生活していたのだと感嘆させられます。

「おてらくご」のお寺の部分も終わり、最後にもう一席。上方落語の名作「はてなの茶碗」。二束三文の水漏れする茶碗が、あれよあれよと千両の茶碗になるお話。

最後は師匠より踊り芸のサービス。後頭部に面をつけて、後ろを前に見たてた踊りでこれまた大爆笑。大笑いしながら、お寺、仏教に触れていた、大きく機会となりました。



春季彼岸会報告

前日の雨も上がり天候に恵まれての法要。法話は柴田好政氏（高松市・勝名寺）。島倉千代子さんの仏教讃歌「しんらんさま」を唄いながらのお話。浄土真宗のおまかせの世界を伝えてくださいました。

「しんらんさま」

そよ風わたる 朝のまど はたらく手のひら 合わせつつ 南無阿弥陀仏 となえれば しんらんさまは にこやかにわたしのとなり いらっしやる きらめく夜空 星のかげ あらしにきえてもかくれても 南無阿弥陀仏

古澤巖さんが再び観音寺に



一昨年、一心寺で奉納公演をされた世界的ヴァイオリニスト・古澤巖さんが再び観音寺へ。今度はベルリン・フィルハーモニーの精鋭を引き連れて、より一層素晴らしい演奏となることでしょう。十二月十三日午後七時より、観音寺市民会館にて。チケット取り扱いは市民会館、オオサカヤなど。極上の音楽を楽しみましょう。

映画「この世界の片隅に」紹介

昨年公開され予想を超える大ヒットとなったアニメ。広島、呉を舞台にした第二次世界大戦中の物語。主人公は特別な存在ではなく、普通の少女。だからこそ、誰もが自らと重ね合わせることができのではないかと思います。

この作品には、一昔前の浄土真宗門徒の姿が出てきます。祖母の家にスイカを持っていき「お供えしようね」。結婚式は、家の仏壇の前で僧侶と一緒に新郎新婦、親族みんなで読経。戦死した兄の葬儀には「サレハ朝ニハ紅顔アリテ タニハ白骨トナレル身ナリ」、白骨の御勸章をあげる。いつでも仏さまとともに生活していたことが分かります。

兵隊に行った兄を亡くし、手をつないでいた姪は爆弾で死に、自らも片手を失った彼女。それでも夫と、家族とともに、「明日も、来年も、十年後もずっと」この先ずっと私は笑顔の入れ物」と言う彼女。ただ悲惨な戦争映画というのではなく、人間の強さも描かれています。観る者それぞれが何かを感じるでしょう。

(九月十五日にDVDレンタル開始)

